

第9回 旭川市民文化会館整備基本計画検討会 会議録（要旨）

会議名	第9回 旭川市民文化会館整備基本計画検討会
開催日	令和8年2月17日（火） 午後1時30分から午後3時30分まで
開催場所	旭川市民文化会館 2階 第2会議室
出席者 （敬称略）	参加者 全12名のうち9名出席 大口 優、大谷 薫、大野 恵司、佐藤 淳一、鈴木 雄太、 水野 雅文、南 裕一、宮田 健一、森 傑 事務局 3名出席 社会教育部 文化ホール整備担当部長、副主幹、主査 国立大学法人北海道大学
会議の公開非公開の別	公開
傍聴者数	4名
会議資料	別紙のとおり

1 開会

2 議事

事業アイデアカードを活用した課題の整理

進行役：

- ・先日、当研究室が基本構想・基本計画の策定に関わった苫小牧市民文化ホールが完成した。基本構想の検討からは約10年を経過しており、やはり施設整備には相応の時間を要することがわかる事例であり、旭川市においても、少なくとも同程度の時間を要するであろうことが見込まれる。
- ・基本構想が概念的な整理であったのに対し、基本計画として施設の性格を定めるためには、「施設を使って何をするか」という想定がある程度定まっていなければ、ハード面について議論することが難しい。
- ・前回よりスタートした管理運営面の議論は、まさにこのソフトとハードをつなぐ最終段階の議論として、どのような点を重視していくのかということ、具体的な事業のアイデアを素材に行ってきたところである。

- ・ 前回は、ソフト面の議論が盛り上がった部分もありつつ、結果として全体的に時間が不足してしまった。今回は、最初に前回の議論内容を確認・共有し、そちらを補強しつつ、精度を高めるよう議論していきたい。
- ・ 議論の導入として、最初に有識者より、前回の議論内容と最新の事例を紐付けて御紹介いただくこととしたい。

● 前回意見を基に事業の方向性について検討するための事例紹介

有識者：

- ・ 今回は、前回の議論内容について振り返り、一段階ステップアップした検討を進めるにあたって、事業の在り方・建築の在り方について事例をお示ししたい。
- ・ お示しする事例が一番正しいということではなく、課題解決の視点と、その視点に基づく解決手法についての一例としてお示ししたいという意図であり、旭川の新文化ホールにおいてどこを目指していくか、ということを考えていただくきっかけになればと思う。

(1) 鑑賞：親子向けの事業・施設で次世代継承

▶ やまぎん県民ホール（山形県山形市）

- ・ エントランスロビーと外部に面し、ホール事務室に隣接した託児室。事前予約制・有料で、一時預かりを行う。

▶ 由利本荘市文化交流館カダーレ（秋田県由利本荘市）

- ・ 共用部に面したオープンスペースの中にキッズスペースがあり、開館時間中は無料で自由に利用可能。

▶ 茨木市文化・子育て複合施設おにクル（大阪府茨木市）

- ・ 親にとって便利な場所ではなく、子供が主体で活動する場所のある事例。
- ・ 【子育てフリースペースわっくる】は、子育て中の親子が自由に利用可能。子どもと保護者が一緒に遊び、憩い、交流できる場所。

(2) 活動：多様な「発表」に対応するホール機能の確保

▶ あきた芸術劇場ミルハス（秋田県秋田市）

- ・ 2,007席のメインホール（音楽中心）、800席の中ホール（演劇・ダンス中心）、（メインホールは「舞台及び1階客席（1380席）」のみの利用が可能）
- ・ 各ホールのリハーサル室としても利用可能な小ホール（2室・200名程度）をもつ施設。
- ・ そのほか、創作室・研修室・練習室をもつ。

▶ ウェスタ川越（埼玉県川越市）

- ・ 多目的ホール：全面フラットで催事内容に合わせて多様な会場レイアウトが可能（スライディングウォールで1/4の大きさ（約160㎡）から最大650㎡）
- ・ パントリーも備え、展示会・講演会やレセプション・立食パーティー、目的に合わせて幅広い利用に対応可能

(3) 交流：「日常的に訪れたいくなる場」を作り、「市民の交流」を促すためのソフト面の工夫

▶ NPO 法人芸術工房（岩手県北上市）

- ・市民自らアートマネジメントを進める場として設立。
- ・行政・芸術施設・アーティスト・青少年の間に立ち、市民のニーズを把握しながら、鑑賞だけでなく様々な事業の実施や協力、芸術活動の支援、芸術施設での来館者サービスを行う市民活動組織。

▶ ふじみ野市文化協会（静岡県ふじみ野市）

- ・ふじみ野市を中心に活動する文化芸術団体や市民をつなぎ、文化を創造していく文化団体。
- ・市に活動の拠点をおくアーティストや団体が集まってできた有志による公益的な団体
- ・文化協会の5つの領域
 - …情報の発信…参加団体・個人の主催するイベントの広報や紹介を行う
 - 事業の創生…文化芸術振興事業の開催、アウトリーチ、『地域文化クラブ』の開催
 - 活動のサポート…文化施設の優先予約や市の助成金申請のアドバイスなどを提供
 - 人をつなげる…イベントを通じた世代・団体間の交流促進・広く関心を得ることを図る
 - 生涯学習の推進…『大人アート倶楽部』の開催、地域活動を実施・応援

▶ 茅野市民館：NPO 法人サポートC（岐阜県茅野市）

- ・基本構想から検討に携わってきた市民を中心に設立
- ・茅野市民館と協働し、茅野市民館と利用者のサポートにあたっている
- ・施設に事務所を置き、友の会運営、情報紙の配布、公演時のフロント・会場設営補助などを担う
- ・市民・指定管理者・アドバイザー・サポートC事務局などで構成された事業企画会議では広く市民から募集した事業提案をもとに自主事業計画を作成している

(4) 発信

▶ 札幌文化芸術交流センターSCARTS（北海道札幌市）

- ・公募・助成金等の紹介
- ・文化芸術活動に関する日々の活動での困りごとの相談サービス
- ・市内で行われるイベントを中心に様々な広報物を配架するインフォメーションコーナー
- ・札幌で開催される文化イベント情報の提供
- ・札幌市内の文化施設やアートスペースの情報を掲載

進行役：

- ・前回の検討会で皆様からいただいた意見を抽出し、そこから施設に求められている性格と、ハードとの結びつきについて、事例を交えて御紹介いただいたが、一部、特徴的と感じた事例について補足させていただきたい。

▶ ウェスタ川越（埼玉県川越市）

- ・講演会や展示会、学会発表なども想定し「多様な発表を受け止めたい」という施設の性格があり、間仕切りによって可変性のある多目的なスペースを整備することで、これを実現している。

- ・こうした多様な活動を受け止める方策として、当該施設では同じフロア内に収めているが、想定される事業内容次第では、異なるフロアに分散するといったことも考えられる。

▶ **岩手県北上市、静岡県ふじみ野市、岐阜県茅野市**

- ・北上市やふじみ野市、茅野市の事例は、施設の管理運営事業者と協力して、アートマネジメントや活動のサポート、情報発信等を担う市民団体に関する事例。
- ・施設のマネジメントについて、主体的に関わっている事例については、当該団体の事務スペースなども想定されている。
- ・これを全く想定せず後付けにってしまうと、会議室として想定していた空間を無理やり事務室に変更したため、市民のアクセス動線が悪く、うまく活用に結び付かないといった事例も見られる。

▶ **西神中央ホール（兵庫県神戸市）**

- ・普段は、共用部としてふらっと訪れ滞在できる空間を、貸出スペースとしても使用できるという事例。
- ・同じ貸出スペースでも、会議室などの区切られた空間と、こうした共用部とでは、使い勝手やセキュリティコントロールの仕方等も異なる。
- ・こうした活用方法を最初から想定している場合と、整備後に実現しようとする場合とでは、運用に際してのトラブルや、効果的に実現できるかどうかなど、様々な面で差が出てくるものと想定される。

- ・以上の内容も踏まえながら、議論の密度を高めていただきたいと思います。

● **2グループに分かれワークショップ形式で議論**

《鑑賞・交流グループ》

【交流】

ファシリテーター：

- ・ 前回御担当いただいたテーマとは異なるテーマを割り振っているため、軽く前回の議論内容について「資料2」を基に振り返ってから議論に入りたい。

(資料2に基づき、第8回検討会の【鑑賞】【交流】グループで挙げられた意見について確認)

ファシリテーター：

- ・ 前回「優先度が低いのではないかと意見のあったカードについても、「段階的に取り組んでいきたい」「優先度が高いと見込まれるカードと掛け合わせて実施していきたい」等、単純な優劣ではなく、多様な考え方にに基づき検討すべきという部分が共有できたと思うので、そうした視点も踏まえて議論していきたい。

- ・ その上で、今回は基本構想に示す「基本的な役割」との対応関係について考えながら議論ができればと思う。

▶ 情報発信の拠点／交流の拠点

参加者：

- ・ 「発信」に関しての話になるが、前回の議論において、事例にもあった札幌文化芸術交流センターSCARTSのように、チケットを購入でき、情報も揃う場を整備することで、基本構想の「文化交流活動の拠点」の実現に寄与するのではないか、という議論をした。

参加者：

- ・ 館内で行われる催事を網羅的に把握しており、何か知らないことがあっても、そこを訪ねればわかる、という場が重要という内容であった。

ファシリテーター

- ・ 「交流」ともつながる要素であると思う。ただ空間だけを用意して「さあ交流してください」と言っても難しい。集約された情報が、交流のきっかけとなる場面もあるように思われる。

参加者：

- ・ ホワイエなどオープンスペースの活用については、音楽などの練習活動を行おうとすると、非常に大きな音を館内に出し続けることになり、他の活動を阻害してしまうことから、現実的に難しいと思う。音楽の練習活動を行うのであれば、区切られた部屋を設けて、その中で行う方が良いと思う。
- ・ 一方で、学生が集まって自習活動等に使用するというのであれば、札幌文化芸術劇場 hitaru のように、開かれた空間で行うことも可能であると思う。

ファシリテーター：

- ・ 全館一括で貸し出している場合であれば、ホワイエを使った活動もあり得るかもしれない。

参加者：

- ・ 誰と誰が交流することを想定するのか、という視点も大事であるように思う。グループ同士なのか、グループに属さない人も対象にするのか。市民に限定するのか、市外居住者も対象とするのか。現施設の利用者のみを想定するのか、これまで「鑑賞」をしていなかった人の交流も想定するのか…といった点も、ハード面の検討に際しては大切であると思う。

ファシリテーター：

- ・ 御指摘のとおり、交流の対象は「文化芸術活動に関係する人」を想定しがちであるが、それ以外の人、市外の人なども幅広く受け入れ、交流することを想定できる施設になれば、基本構想において「基本的な役割」として記載した「まちづくり」の機能を果たし得ると思う。

進行役：

- ・ 「交流」の性格によって、どのような場がふさわしいか、という点は異なる。例えば、「演奏などの文化芸術活動を行う方々が集まる」ことを重視するのであれば、演奏などにも使用可能な区切られた空間である方が使い勝手が良いだろうが、もともと交流のない人同士の交流を想定するのであれば、エントランスなどの共用スペースを活用する方が良いといったように、空間の整備の仕方が変わってくる。

参加者：

- ・ アーティストと市民を結び付ける市民団体の事例紹介があったが、そうした事業があると、将来的に部活動が縮小した時に指導者の方を紹介したり、活動を通じた出会いをコーディネートするなど、ソフトを使って交流をつなぎ合える場ができるのではないかなと思う。
- ・ ホールの運営全てを民間の方だけで行おうとすると、市内団体の実情を把握できていないといったことも想定される。内情を理解している市民団体と民間事業者とが協力して運営する方が、互いに補完し合えるのではないかな。

▶ 他施設との連携（機能の住み分け、情報発信の連携）

参加者：

- ・ 「鑑賞」「活動」は、機能・規模といったハード面との関係性が想像しやすいが、「交流」は様々な捉え方の可能性があるように思う。だからこそ、「何でもできそうだけれど、何もできなかった」とならないようにしたい。
- ・ 市内には、「交流」が可能な場所や施設が他にもあるはず。それらの施設では不足する何かを充足できる場になると良い。そうした視点で考えると、ハード面では「規模」よりも「性能」と紐付けながら考えていくのが良いように思う。

参加者：

- ・ 事業アイデアカードにあった「地域イベントとの連携」は、他の場所でもできるのではないかな。
- ・ 屋根がある場所に関しても、大雪アリーナや地場産センター等の施設があることを考えると、新文化ホールの機能・性能面を考える際に重要視するものではないようにも感じる。

参加者：

- ・ 色々なことを盛り込むこと自体は良いが、盛り込み過ぎて全部が中途半端にならないようにしたい。
- ・ 建築から70年近く経過している公会堂は将来的に維持できなくなるとしても、現時点で建築から約30年の大雪クリスタルホールは、当面使用し続けるであろうことから、住み分け・使い分けを考える必要があるのではないかな。

参加者：

- ・ 現在は事業のチラシ1枚を取っても、公演の都度、公民館を個別に訪問・持参しているが、一箇所に提出すると市内全域に情報が共有されるような仕組みが構築されれば、そこが情報を集約・拡散するハブとして機能する。新文化ホールがそのハブ機能を担うことができれば、交流の拠点としても機能するのではないか。

参加者：

- ・ 具体的な活動をイメージした意見を見ていくと、個別に見るとどの意見も素晴らしいが、例えば「アンサンブル活動などで明るい場に」という意見と「学生が学習などで使用できる場に」という意見など、同時に両立させることは現実的に難しいと思われる意見も見られる。
- ・ そうした点も踏まえて考えると、市・運営事業者・市民団体等といった団体がある中で、施設運営に関わる体制がどのような形となり、その体制がどのような施設利用の仕方を促す仕組みを持てるのか、という部分が見えてこなければ、ホールの機能や諸室の役割を定めることが難しいように思う。

参加者：

- ・ ハードについては、現代の建築技術ならば良いものはできるはず。しかし、それだけでは、継続的に人が訪れる施設とすることは難しい。
- ・ 施設の個性や特徴となるのは、やはり「何のための施設か」というソフト面であり、多くの人が訪れるホールとなるかどうかを決める要素であるように思う。

参加者：

- ・ 情報の集約には場所も大切だが、収集・整理・提供を担う組織も必要であると思う。
- ・ 以前は旭川文化団体協議会が様々な分野を横断的に扱っていたが、昨年解散してしまった。同様の役割を担えるような団体が必要になるのではないか。

ファシリテーター：

- ・ ここまでの議論から、他施設との連携が重要であり、新文化ホールがそのハブとなるような役割を担う機能になり得るということが、改めて見えてきたように思う。

▶ 販売を伴う催事

参加者：

- ・ 販売を伴う催事の扱いについては、市内にデパートがなくなったことで催事場がなくなり、販売会などを行うことができなくなってしまった。
- ・ 民間事業者が販売等にも使用できる空間として、文化活動と兼用で使える空間があることは、交流にもつながるのではないか。

有識者：

- ・ 「市民主体の運営が特徴的」と御紹介した「茅野市民館」では、全国チェーンの商店が市内に出店する際に1週間ほど施設を借り、店舗として活用し、PRを行った事例などもある。

参加者：

- ・ アンテナショップ的な活用を通してアンケートを取るなどといった活用も考えられる。

参加者：

- ・ クリスタルホールの国際会議場で行えば良いのではないかと？

参加者：

- ・ ルールが厳しく、使うのが難しかったと記憶している。

参加者：

- ・ 設備等が老朽化しており、こうした使用に適さない可能性もあるかと思う。

【鑑賞】

▶ 親子を対象とした事業

ファシリテーター：

- ・ 前回の検討会では、親子を対象とした事業についても議論されていたが、どうだろうか。

参加者：

- ・ 大雪クリスタルホールの「親子室」のように、周りに気を使わず、子どもが騒いでも鑑賞可能な部屋がホール内にあると良いと思う。

ファシリテーター：

- ・ 新文化ホールにとって「鑑賞」は目玉ともいえる機能になるのではないかと考えている。
- ・ 力点を置きたい事業と、基本構想における「シンボル」としての役割を果たすという視点から、前回挙げられた意見をブラッシュアップしていきたい。

▶ 大ホールの席数

参加者：

- ・ 【鑑賞】に言及すると、一番の議題になるのはやはり大ホールのキャパシティをどの程度に設定するかという点であり、事業アイデアカードにあった3,000席は極端だと思われるが、では1,000席か、1,500席か、2,000席かとなると、意見が分かれると思う。

- ・ どの程度の席数とするにせよ、kitara や hitaru などの施設でも行っているように、席数を区切って1階席のみ使用できるようにするなどして、一つのホールを様々な規模感に対応できるようにすることは重要であると思う。大雪クリスタルホールとも分業し、多様なキャパシティに対応できると良い。
- ・ その上で、最大キャパシティをどの程度として設定するかによって、できることが大きく変わってくると考えている。活用の仕方からキャパシティを決める必要がある一方で、キャパシティが決まらなければ、何ができるか具体的な議論が難しいようにも思う。

参加者：

- ・ 北海道は他の都府県に比べ、人員や機材の移動費を要する関係上、興行のハードルが若干高いように感じる。ドームツアーも、北海道には来ない場合もある。
- ・ 基本的に北海道に来るホールツアーは札幌+1~2箇所になると思うが、旭川は札幌へのアクセスがしやすいことから、旭川ではなく道東の会場へ行ってしまいうツアーもあるように思う。

進行役：

- ・ 札幌と旭川とで、一つの公演会場の枠を取り合うといったことは考えられるか。

参加者：

- ・ 札幌は市内に kitara と hitaru があることで、催事の性質に合わせて割り振りができる。どちらも 2,000 席規模の施設であり、旭川がそこへ割って入り、公演の枠を取り合うのではなく、興行等において、札幌に加えてもう一箇所開催する際の選択肢といった位置付けの方が妥当なのではないか。

参加者：

- ・ 大ホールのキャパシティを定める要件になりそうな事業として、文化系部活動の全国大会が挙げられると思う。
- ・ 中学校・高校の合唱の全国大会は、2,000 席以上かつ新幹線でアクセス可能であることが開催場所の条件となっており、北海道はそもそも対象になり得ない。
- ・ 一般の大会等は 2,000 席以上であることが条件になり、北海道での選択肢は基本的に kitara と hitaru のみとなる。もし、新文化ホールが 2,000 席以上になれば、運営側としては会場を分担することができ、旭川市にも経済効果があるのでは、という話は出ているのだが…。
- ・ 吹奏楽の全国大会はどうか。

参加者：

- ・ 規定があるわけではないが、旭川の場合、ホールの席数よりも宿や搬出入・送迎のバスなど、他の面で厳しいように思う。
- ・ 吹奏楽に関して、一般と大学の大会は持ち回りであり、2,000 席程度必要。北海道では kitara で開催している。
- ・ 以前、宇都宮市で開催されたことがあったが、ホールの席数が 2,000 席以上であることに加えて、関東全域で見ると多数の宿があり、また交通網も充実している。

参加者：

- ・ 昨年末に hitaru で札幌交響楽団による大型のコンサートが開催されていたが、全席は埋まっていなかった。札幌において、かつ年に数回というレベルの大型コンサートでもそうした状況であることを考慮すると、旭川における周辺人口などを踏まえて将来の事業について考えたとき、2,000 席は過剰ではないかと感じる。

参加者：

- ・ 集客について考えたとき、「〇〇席では集客が難しい」という視点もあるだろうが、「〇〇席では、全席埋まっても収支がマイナスになってしまう」という視点も必要であるはず。どれだけ「集客しやすい席数」であったとしても、そもそも収支が成立せず、使われない施設になってしまっただけでは意味がないのではないかと感じる。

ファシリテーター：

- ・ 基本構想の「コストパフォーマンス」に関係する、重要な視点であると思う。単純に整備費や維持管理費といったコストを下げれば良いという話ではなく、コストに対してどれだけの事業開催や施設収入といったパフォーマンスが得られるか、というバランス感のもとで考える必要があると思う。

参加者：

- ・ 施設使用料とも関係する部分であると思う。

進行役：

- ・ 原則としてランニングコストや近隣類似施設の金額設定など、様々な要素を踏まえて決定することと思われるが、運営方法によっても変化することが想定される。
- ・ 行政による直営の場合は、条例等に基づき決定されるのが一般的であるのに対して、例えば PFI 等の手法になると、条例等に定められた上限額の範囲内で、より利用頻度が高くなるよう戦略的に金額を安価に設定する場合や、時期等の条件によって金額が変動する仕組みを設ける場合などもあり、より柔軟な対応が見込まれるとともに、そこで得られた収入が施設運営に活かされるといったことも考えられる。

ファシリテーター：

- ・ ここまでの議論から、「興行として成立するかどうか」という視点は、重要な検討事項の一つであることが共有されたかと思う。
- ・ 一方で、「どのように見たいか」「どのような人に見てもらいたいか・来てもらいたいか」という視点も大切なポイントであるかと思う。ここまでの意見でも、「親子」「家族」といったキーワードが出てきていたが、どのように考えられるか。

参加者：

- ・ 例えば一般的な管楽器・打楽器などと、箏などの和楽器とで、求められる仕様が異なるといったことも考えられるのだろうか。

参加者：

- ・ 和楽器は専門外であり確たることは不明だが、合唱や吹奏楽は、それぞれ専用に必要な規模・設備等はないものと考えられる。
- ・ 例えばバレエ等であれば、オーケストラピットの必要性などに関係すると思われる。

ファシリテーター：

- ・ 公演前後の時間の過ごし方、という視点とも関わってくるのではないかな。

参加者：

- ・ ドレスアップして、ホワイエでゆっくりと過ごすことも考えられる。そうした催事であれば、お子様連れの方は少なく、もう少し年齢層が高くなることが想定されるかもしれない。
- ・ また、そうした催事は、事務室のような空間で開催するにはそぐわないと感じる。

参加者：

- ・ 「市中心部で、雨天時に行く場所」という視点で考えたときに、新文化ホールに子どもが遊べるようなスペースがあれば、施設を訪れるきっかけになるかもしれない。

参加者：

- ・ 現在は「旭川市北彩都子ども活動センターASOBI～BA」があり、そちらでも可能になった。

参加者：

- ・ 旭川市内の事業例として、上川合同庁舎ではピアノが寄贈され、月に一度、無料で鑑賞可能なランチタイムコンサートが開催されているが、昼食時に限定しているため、周辺への影響も少ない。
- ・ 当該コンサートの鑑賞を目的に施設を訪れる人もいると思われ、合わせて集約された情報を見てもらうことができれば、別の催しでも施設を訪れてくれるきっかけにつながると思われることから、当該事業は「日常空間での音楽体験」事業の参考になると思う。

ファシリテーター：

- ・ お洒落をして参加するフォーマルな催しと、トークイベントや共用空間での音楽鑑賞、子どもたちを連れて行くような日常的な利用との使い分けというのは、今後施設機能を考えていく上で大事な視点になる可能性がある。

▶ まとめ 《交流・鑑賞》

【交流】

- ・ 誰と誰の交流を想定するか考えることが大事
：日常的にふらっと訪れる人とそうでない人、子どもと大人など
- ・ 交流のきっかけを設えていく必要がある
：情報の集約・発信拠点機能が交流拠点機能につながる

- 新文化ホールだけでなく、市内外の様々な場所で行われている様々な活動との連携
：「道北のランドマーク」として、周辺自治体にまで拡大し、新文化ホールが交流のシンボルになると良い
- 文化芸術活動との関連が薄い事業
 - ・ 前回の議論において、優先度は必ずしも高くないと評価されていた
 - ・ 市内他施設等で開催されている活動はやらなくても良いと思われる一方、現在市内には催事場がなく、販売等の活動を行える場所があっても良いのではないかと

【鑑賞】

- 大ホールの席数をどう設定するか
 - ・ 札幌と旭川の役割分担が重要
 - ・ 札幌の2,000席規模のホールと重複を避けて催事を担えると良い
 - ・ 基本構想の「コストパフォーマンス」を考えていくことが大切
- お洒落をして参加するフォーマルな事業と、子どもや家族と気軽に施設を訪れる日常使いとの役割分担が重要

《活動・発信グループ》

【活動】

ファシリテーター：

- ・ まず、前回の議論内容について確認し、その上で基本構想の記載を思い返しなが、より注目すべき点や議論が不足している点など確認し、精度を上げていければと思う。

(資料2に基づき、第8回検討会の【活動】【発信】グループで挙げられた意見について確認)

▶ 発表機能の規模

ファシリテーター：

- ・ 「色々な選択肢が欲しい」という意見については、選択肢は当然あればあるほど良いのだが、全てを叶えられるわけではないので、何を重視していく必要があるのか、御意見いただければと思う。
- ・ 大ホールとは別にホールを設ける際、どの程度の規模が望ましいと考えられるか。

参加者：

- ・ 1,500～2,000席の大ホールがあることを前提として考えて良いのだろうか。

ファシリテーター

- ・ 前回の議論においては、そうした意見が示されていた。

- ・ 大ホールをどの規模にするかというのはもちろん大きな課題であり、現在鑑賞グループでも議論されていると思うが、様々な活動を生み出すという視点で考えたとき、どのように考えられるだろうか。

参加者：

- ・ 前回の議論を見ると、面積との兼ね合い次第ではあるが、公会堂の役割の継承という視点で考えたとき、500～800席のホールがあった方がよいように思う。

ファシリテーター：

- ・ 大ホール・小ホールだけでなく、中ホール的な位置付けの機能があるべき、という視点であると思う。
- ・ 一方で、100席程度の規模感についても市民活動での需要が高く、市内他施設で同等規模の機能もあるが稼働率が高いとの意見があった。こちらは平場で良いか、ステージと客席が必要かといったスペックの課題もあると思われるが、平場で100人規模の部屋であれば、技術的には造ることができると思われる。利用実態から考えたとき、仮設でなく固定式のステージ・客席といった設えが必須と考えられるだろうか。

参加者：

- ・ 市内で小規模なコンサート等の開催場所と考えると、旭川市市民活動交流センター CoCoDe が約200席、木楽輪が80～100席、現・市民文化会館の小ホールが約300席。ある程度、音が良く聞こえないと使いづらいという面はあるが、100席前後というのは使いやすい規模感なのではないかと感じる。
- ・ 一方で、各分野で活動している人口は、徐々に減少していると想像されることから、音楽など特定用途に特化した室ではなく、ダンスや他の催しものなど、多目的に使えるように整備しなければ、稼働率が低くなってしまわないだろうか。

ファシリテーター：

- ・ 先日完成した苫小牧市民文化ホールでは、活動に用いる諸室の性能に関して、座席の有無ではなく、「防音仕様にするかどうか」という点が、部屋の用途を定める大きなポイントになっている。
- ・ 防音仕様にした諸室は、音楽や演劇、バレエやダンスなど、幅広い活動での利用が想定されており、逆に防音仕様でない部屋は、工作や絵画等での利用が想定されるといった形で分けられている。
- ・ これまでの議論における「発表の場」に関しては、基本的に防音仕様の部屋として整備することになると想定される。

参加者：

- ・ 活動の規模に応じて部屋を分割できる仕様であれば、様々なキャパシティにも対応できると思う。ただ、例えば、そうした部屋を2つに分けて使用する際、一方でダンスを、もう一方で会議を行おうとすると、ダンスの音を聞きながら会議するようなことになる。

- ・ 多目的に使用可能な部屋として整備することを想定すると、実際の利用のされ方次第で、防音性能が必要な場合もあれば、必要ない場合もあるのではないか。

ファシリテーター：

- ・ 活動室を何室整備し、そのうち何室を防音仕様にするのか、ということを定める際には、現状の利用実績なども踏まえて分析する必要があると思われる。
- ・ その上で、発表にはどのような種類があり、そのうち防音が必要となるものは何になるのかということを考えていく必要がある。

▶ ホールの席数

参加者：

- ・ 事例紹介のあった「あきたミルハス」では、2,000席の大ホールを1階席だけ使用して1,380席のホールとしても使用できるとのことであった。同様に、1,500～2,000席の大ホールを、1階席だけ使用することで500～800席のホールとしても使用できるのであれば、ホールは1つで良いのかもしれない。

参加者：

- ・ 施設を借りる側の立場としては良いのだが、整備する側の立場で考えると、1,800席の施設が実際には1,300人くらいでしか使われなくなると、面積以外にも設備や維持管理など様々な面で無駄が生じてくる可能性もあると思われるので、そうした点も考慮し、バランスを取れる規模感の設定が必要になると思う。

進行役：

- ・ 席数を減らして使うことができるようにするかどうか、というのは手段の話であり、結局のところ、どのような目的で使用するか、という点次第であるように思う。
- ・ また、先程御指摘にあった、部屋を分割する場合に、一方で大きな音が出る活動を、もう一方で音が出ないような活動を行う場合についての話であるが、そうした活動を同じ時間帯であっても同居させられる施設にしたい、と考えるのであれば、おそらく可動間仕切りでは防音性能が不足し、自立した部屋として整備する形になってくるものと思われるが、そうした目的がないのであれば、考える必要はないと思われる。
- ・ このあたりの詰めが大事なポイントになってくるのではないだろうか。

参加者：

- ・ 大ホールには、相応の規模が必要だと思う。今もコンサート等の開催を楽しみにしている方々は多く、新しい施設の大ホールが1,000席以下で、チケットが取れないといったことになれば、落胆される方も多いのでは。

ファシリテーター：

- ・ 基本構想では「著名なアーティストの公演から文化団体の発表まで」としているが、では「著名なアーティスト」をどのように想定するかによって、望ましい席数は変わってくると思われる。

参加者：

- ・ ホールの規模については、現施設の稼働率や、イベント開催時にどれだけ人が入っているのかといった実績を基に考えるべきであると思う。適当に造って席が不足したり、余分に大きく造ってガラガラになってしまっては仕方がない。

ファシリテーター：

- ・ 今後、事務局側で現施設の稼働率などの具体的なデータを揃えるとともに、現在の規模・機能では実施できていない事業についても、同時に考慮していく必要があると思われる。この点は、ヒアリングの結果なども含めて考えていくべきであると思う。

参加者：

- ・ 現施設で行えていない催しについて想定する際には、極端な例になるが、例えば歌舞伎を呼ぼうとした場合、旭川に需要があるのか、どれくらいの規模のホールが必要なのか、といったことも踏まえて考える必要があると思う。
- ・ だから、主催団体がどこなのかは、それは見通しが立たない部分もある。あるいは文化サークル、あるいは文化団体がやるのか、あるいは市が連絡するのか、あるいは文化会館が主体になっていくのかによってもまた規模は変わる。

ファシリテーター：

- ・ 御指摘のとおりである。基本計画の策定後、管理運営のより具体的な方針について検討する段階に際しては、基本構想における「コストパフォーマンス」なども踏まえ、「誰が」「どのように」「どのような資金の資組みで」運営していくのか、といった部分を考えることになる。
- ・ その際には、やはり現施設では開催できない事業についても考えることになると思うが、そこで開催すべき事業が出てくれば、それに見合った運営をしていくべきだと思う。
- ・ 全てが叶うかどうかはわからないが、現実を踏まえた希望を描いていく必要があると考えており、それと関連していくのが「発信」であると思う。

参加者：

- ・ 小ホールでは落語の会がたびたび開催されているが、ほとんど満席近い状況。また以前、大ホールで青年大学の行事を何年も開催していたが、こちらもほぼ毎回、満席であった。
- ・ そうした体感から、大小ホールとも、少なくとも現在の規模は必要なのではないかと感じている。

参加者：

- ・ 将来的に公会堂がなくなった時、新文化ホールに集約することを考えると、今の小ホールではちょっと足りないと思われることから、その中間、どの程度の規模感を設定するのか考えなければならないと思う。
- ・ また、現施設の稼働率を踏まえることはもちろんだが、近隣他施設との兼ね合いの方が大事なのかもしれない。既存施設との住み分けも大事だと思うが、老朽化している近隣施設は他にもあり、それらの施設が担っている活動を継承・集約するといった視点も大事であるように思う。

▶ 運営について

ファシリテーター：

- ・ 多様な活動を受け止めることを想定した際、市民がどのように「活動」の中に入っていくか、という部分に関して、どのような形が想定されるだろうか。例えば、単純な貸館として利用者に委ねるのか、あるいは運営や事業企画に参加いただくのか、など。

参加者：

- ・ 「茅野市民館」の事例にもあったが、行政と市民の間にNPO法人があり、運営をサポートするとともに、施設内に事務用スペースもあるというのは良いと感じた。
- ・ 施設を訪れた市民が、気軽に情報にアクセスできたり、活動したい人の相談の場になったりといった場合は、現在の旭川市内にはなく、求められている機能なのではないか。

参加者：

- ・ 旭川市市民活動交流センターCoCoDeでは、市民活動に関する情報の集約・発信と、活動支援を行っている。ただ、こちらの対象はより広範な「市民活動」であり、文化事業も一部含むものの、当該分野に特化したものではないため、ここで求められているものとは若干異なるかもしれない。

参加者：

- ・ 恒常的に様々な催しを開催しやすく、活動が続き、いつ訪れても見学できるようにするためには、市民か事業者かは別として、積極的に関与する組織・人材が必要になると思う。

【発信】

▶ 次世代に向けた発信

ファシリテーター：

- ・ 基本構想の検討段階においては、これまであまり文化芸術に触れてこなかった次世代に対して、どのように「発信」するかといったことなどを議論してきた。

- ・ 前回の検討会では、それを実現するきっかけや窓口はどこになるだろうか、という点が議論されており、より具体化が必要かとも見受けられたのだが、どうだろうか。

参加者：

- ・ 以前、旭川駅前にデパートがあったときには、買い物に行ったついでに美術館に寄っていた。美術館に行くこと自体を目的とはしていなかったのだが、用事があるから、寄るきっかけができていた。
- ・ また、別のデパートには催事場があり、そこで市民団体による絵画の展示会などが行われていたので、そうした催事を見学した記憶もある。
- ・ 興味を持っていない人に見てもらうためには、そうした何かの流れで目に入るようなきっかけがないと、なかなか見てもらえないように思う。

参加者：

- ・ 駅には観光案内所があるが、新文化ホールには芸術案内所があるというのも良いと思う。
- ・ 近隣のイベント開催状況などを一元化して教えてもらえる、観光のアクティビティセンターに相当する、文化芸術のインフォメーションセンターのような場所になると良い。

ファシリテーター：

- ・ 市民だけでなく、市外の方やアーティストの方などがイベントの開催場所を探している時などにも、答えられる場所があると良い。
- ・ 観光案内所との連携といったこともできれば、まちづくりにも寄与するように思う。

参加者：

- ・ 市民ギャラリーでは様々な展示を行っており、また個展の情報なども集まっていて、それを紹介してくれるスタッフの方もいる。ただ、他の用事のついでに寄るような立地ではなく、興味を持って訪れてくれる人以外にはなかなか周知することが難しいのではないかとと思う。

参加者：

- ・ 新文化ホールに芸術案内所のような機能を設置する場合には、専門的な知識を有する人材を配置できると良い。
- ・ 発表者だけでなく、活動を支援する人たちの活躍の場も一緒にあると良い。

ファシリテーター：

- ・ 新文化ホールの催事内容を発信するだけではおそらく不足であり、他の色々な施設等と連携しながら発信していくことが大切になりそうである。

▶ 住み分け

参加者：

- ・ 公民館や地域住民センター等の施設で行うような催事との兼ね合いをどのように扱うか。考えを分けるのか、一緒にやるのかといったことについても整理しておく必要があるように思う。

参加者：

- ・ ときわ市民ホールでは、サークル活動や運動なども行っていたはず。それらの活動との関連も整理する必要があるかもしれない。

▶ まとめ 《活動・発信》

【活動】

- ・ 前回と同様、発表の場としてのホール規模や、活動室の規模
 - ・ 公会堂機能の継承や、近隣の活動場所との住み分けで規模感を設定
- ・ 活動室のスペック
 - ・ 防音が必要か、そうでないか
 - ・ 同じ用途で使うというより、別の用途が重なっていくことがあるのではないか
 - ・ 音楽やダンスなど、音が出る活動をしている隣で会議等を行うことは難しいと思われるのでそうした点も踏まえ検討
- ・ データに基づく検討
現施設の稼働率 + 現施設のスペックではできない活動を踏まえ、今後検討
- ・ 様々な活動の支援を誰が担うか
NPO 法人などの団体が、行政と市民の間に入って市民活動を支え、窓口になっていく仕組みは魅力的

【発信】

- ・ 文化芸術の拠点、市内全域の文化芸術情報のワンストップ拠点になる
 - ・ 元々関心がない層にもアピールするために、旭川あるいは道北の芸術の窓口として整備
 - ・ 旭川駅の観光窓口ともつながりを持ち、まちづくり全体に波及していけると良い
 - ・ 文化芸術に関する活動を始めたい市民が、気軽に相談に行ける窓口

進行役：

- ・ 本日の議論について、簡単にまとめさせていただきたい。

《活動・発信グループ》での議論について

【活動】

- ・ 全てを一新するというより、現に市民の方々がやっている活動をしっかり支えていく場を整理しようという点が重視されているように感じた。
- ・ 特定用途に偏った部屋・場所を設けるというよりは、防音の必要性から、部屋の位置関係やエリアを分けるといったことを考えていくことが、ハードとのつながりになる。
- ・ 現在行われている活動をきちんと把握し、その活動をレベルアップして充実感が得られる施設にしていきたいという考え方は、施設の性格付けとして、今回新たに出てきた部分かと思う。

【発信】

- ・ 文化芸術の案内所的な機能という話が出ていたが、奥まった事務スペースでは、なかなか人は行かないと思われる。目が届きやすい場所で、気付きやすく、フラットに入れる相談窓口のような形で、施設に入ってすぐに見えるところや、サイン・案内が目につくところが望ましいとなれば、ハードとして、エントランスホールと一体的なところに設けるのが良い、といった考え方につながっていくのではないかと思う。
- ・ 以上2点は、今後ハード面の議論の手がかりになると思う。

《鑑賞・交流グループ》での議論について

【交流】

- ・ 市内の様々な施設・場所で、バラバラに行われている活動をつないでいく、ハブのような交流機能が大事という意見が印象的であったように思う。こちらは、ハードに直結するというよりは、ソフト的・プログラムの部分のウェイトが高いように思われる。
- ・ ソフトを全てハードと結びつけて実現しようとする、施設の規模としても整備費としても限界がある。したがって、運営としてうまくスペースを使いこなすような工夫が必要。
- ・ 全てのソフトをハードと結びつけて実現しようとする、施設規模の面でも整備費の面でも限界がある。したがって、運営としてうまくスペースを使いこなすような工夫が必要。
- ・ 例えば月に1回程度、活動している方々をつなげていくイベントのような事業であれば、エントランスを使って開催できれば良い、といった話になってくるかもしれないので、大事な視点になるものと感じた。

【鑑賞】

- ・ お洒落をして参加するフォーマルな事業と、子どもや家族と気軽に施設を訪れる日常使いとの役割分担という話があったが、これはフォーマルな服装を求められるイベントに合わせたホールと、普段着で日常使いができるホールといった形で、ホールの性格付けを分けていくような形を想定した議論だろうか。それとも、一つのホールで両方の活動を受け止めることができるようにしたいという議論だろうか。

参加者：

- ・ 例えば、事業アイデアカードにあったオペラを鑑賞する場合、ジーパンを履いて行く感じにはならないと思われ、そうしたシチュエーションが大事になるように思う。
- ・ 例えば、子育てが終わられている年代の方々がドレスアップして行くような場所は、現在の旭川にはないと思う。行くと身が引き締まるような、お洒落をして行く場所があっても良いのではないか、という視点での意見であった。

進行役：

- ・ 現時点で施設内にホールを何個造るか決まっているわけではないが、仮に複数造る場合、ホールの性格付けというメリハリのようなものは持ったほうが良いということかと思う。
- ・ また、一つのホールだけで全部を兼ねることはなかなか厳しいのでは、との御意見もあったようだが、これはそのとおりかと思う。
- ・ 例えば、大ホールのサブ機能として中～小ホールを扱う場合は、大ホールと中～小ホールの仕様を同じように設定することが想定される。そうではなく、大ホールと中～小ホールで異なる性格を持たせようとした場合、ハードの考え方は幾分変わってくると思われる。
- ・ 当然、本日の議論だけで決まるような内容ではないが、その辺りが、次回以降で議論を詰めていく際のポイントになるのではないかと思う。

進行役：

- ・ ここからは、本日の議論全体について意見交換の時間としたい。
- ・ それぞれのグループで出てきた興味・関心のある話題や、ここはもう少し議論したほうが良いのではないかとといった点などあれば、御意見をいただきたい。

参加者：

- ・ 【鑑賞】に関して、大ホールの規模感を規定する要素として、札幌市内の2,000席規模のホールにおける大型コンサートの席入り状況などを見ると、旭川市において同程度の規模感を備えるということにはならないだろう、という議論になった。
- ・ 一方で、旭川市の新文化ホールで活動しようとする人は、旭川近郊～道北全域まで、広範囲に見込まれるように思う。
- ・ 以上2点を踏まえ考えると、大ホールの規模感について、札幌市の kitara や hitaru ほど大きくはなく、しかしあまり小さくすることも難しいといったことは、おのずと見えてくるように思う。

進行役：

- ・ いただいた御意見をホールの性格として整理すると、札幌市内の kitara ・ hitaru といった2,000席を超えるホールの良さ、都市としての利便性や良さといったものを踏まえた上で、北海道全体を代表する施設というよりは、旭川として担うべき圏域や現実的なイベント等の特性をきちんと押さえていこうといった形になるかと思う。

参加者：

- ・ 地方に行くほど施設が充実しておらず、活動に適した場所がないという場合もあるかもしれない。そうした地域の子どもたちの活動の場としても、新文化ホールを使ってもらえたら良いと思う。

進行役：

- ・ 以前お話したことがあったかと思うが、近年はどの市町村においても、施設の建替え検討に際して、規模の大きなホール施設等は大きい都市に任せようという時代の流れになってきているように感じる。
- ・ そうした時代において、旭川市は期待される側のポジションであると思うが、催事の特性次第で、主催者側から見て、旭川で開催できたら使い勝手が良いと思われる催しと、札幌で開催の方が合理的という催事に分かれるであろうことから、それらを整理した上で、規模感を分析していった方が良いように思われる。

参加者：

- ・ 北海道内における施設の特性の整理、というのは大切であると思う。
- ・ 立派な施設が建っている市町村もあると思うが、住民の方の利用希望を満たす規模感等であるかというのは、また別であるように思う。
- ・ 例えば、近隣市町村に対し、旭川にどのような施設を期待するのか、アンケート等の調査を行ってみても良いかもしれない。

参加者：

- ・ 現在、旭川市民文化会館では、毎月初めに一斉受付を行い、利用希望が重複した場合には抽選で使用者を決定している。
- ・ 抽選に当選し、開催された催事については把握できるが、抽選で外れたために開催できなかった興行事業が何件程度あるのか、もし確認することができれば、大ホールの席数を決める上で有効なのではないだろうか。可能な範囲で調査してもらえたらと思う。

進行役：

- ・ 例えば、抽選に当たって旭川を使ったが、本音としては札幌で行いたかった等のケースもあるかもしれない。そうした実情も含めて把握できると、良いポイントになるかと思う。

参加者：

- ・ グループワークの中でもお話したことだが、ホールの席数をどの程度に設定するかという部分については、現・市民文化会館の利用実績を基に検討しなければならないと思う。
- ・ 各ホールの稼働率に加えて、開催された催しにおいて、実際にどのくらい席が埋まったかといったことも分かれば、もっと先に進むのではないだろうか。
- ・ 全ての数字を把握できるかどうかわからないが、もし分かる部分があれば、いつか出していきたいと考えている。

進行役：

- ・ 先程【活動】の議論において、全体的な考え方の軸として、まずは現・市民文化会館で行われている活動をしっかり押さえて、そこを下支えしていくことが基本であるという話であったかと思う。
- ・ 同様に【鑑賞】の議論でも、大ホール等で現に行われている活動をしっかり押さえようということであった。
- ・ これらは施設の方向性として、とても大事な部分であると思う。施設によっては、建替えの機会に合わせて一新し、全く違う施設として整備しようという考え方もあると思うが、総じて、現施設においてベースとなっている事業をきちんと押さえて、蔑ろにならないようにしていこうとするところが大きなポイント、考え方の軸としてあるということは確認できたかと思う。

参加者：

- ・ 道内の他自治体で、建替えを予定していたが撤回された事例もある。また、新しいホールはあるものの、規模が小さい自治体も多い。旭川市が一定の規模を有する形で建替えを行うことができれば、それぞれは数年に一度といった程度の頻度かもしれないが、他自治体の方々が旭川のホールを使用するといったことも起こり得るかもしれない。
- ・ また、音響の良いホールには聴きに行くし、演奏しに行く。新文化ホールが主催者側から評価される施設になれば、そこで演奏したいという市外の人が増え、施設利用の増加と、観客として市外から訪れる人の増加につながるのではないかと。
- ・ そうしたことから、近隣市町村の意向・状況を踏まえてホールの席数を定めることも大切であると思うが、機能に関しても、どのように設定するか考える必要があると思う。
- ・ また、【活動・発信】グループで市民と行政をつなぐNPO法人の話題が出ていたのに対し、【鑑賞・交流】グループでは、情報発信・交流拠点としてのハブ機能に関して議論になった。形は違えども、どちらも施設運営に関わる組織について議論しており、これら団体の事務局を誰が担うかが大切であると思う。
- ・ 仮に施設運営の主体が市役所や民間事業者だけになると、市民にとって他人事というか、余所の人が運営している場所、といったイメージになるおそれがある。市民が主体的に立ち上げた団体が運営に関わることでできる仕組みを構築できれば、自分たちの会館であるという意識がより強く根付き、能動的な活動拠点になるのではないかと考える。

進行役：

- ・ ハブ機能に関しても、行政が担うより、市民の方々のほうが感覚的に実態をよく把握されており、上手く調整することができるのではないかと。
- ・ もし、ハブ機能と合わせて「音楽に触れ合う機会を紹介する」といった事業を市民を中心とした団体がマネジメントしていくということが大事となれば、それを前提としたソフトとハードを準備していくことになる。

- ・ また、市民中心の団体となると、建物が完成してから動き始めたのでは遅い、という場合が多い。あと1年程度は基本計画の策定検討が続くと思うが、それが終わる頃には始動しなければ、間に合わないおそれがある。
- ・ そうした団体を立ち上げることがあれば、本検討会に御参加いただいている皆様は、新文化ホールの考え方を熟知している市民として、ぜひ御協力いただけると良いと思う。

参加者：

- ・ 自分の周りの子育て世代に話を聞くと、ほとんどが共働きである。子どもたちは、学校が終わると放課後デイサービスに行き、親の仕事が終わって迎えに来るのを待つ。
- ・ 昔に比べて、親も子も、自由に動ける時間が少なくなっているように感じる。人を集めるとか、交流を促すと言っても、移動手段がないとか、親子で行けないとか、だんだんと余暇の時間、自由に動ける時間が少なくなっているように思う。
- ・ 人が集まる施設にするためには、そうしたことも踏まえた上で、いかに使いやすく、訪れやすい施設にするかということが、今後とても重要になるのではないかと感じた。

進行役：

- ・ 「子育て」となると親目線だが、基本的には子ども目線が大事だと考えている。親子や家族で過ごすことができるなど、日常生活の中のある時間帯に、この新文化ホールが入ってくるような形が上手く作れたら良いと思う。
- ・ これはおそらく、キッズスペースを設ければそれで良いという話ではなく、先ほどのハブ機能や、アート・芸術に接したい方々の相談窓口機能、現在も旭川駅にある観光案内所機能など、様々な支援の窓口となっている場があると思うのだが、それらと連携することで、機能的・体制的に実現の可能性が見えてくるように思う。
- ・ 子どもの送迎について、地域によっては夕方になると開いている店舗等がなく、放課後や部活後に行く場所がないので、バスターミナルの待合室に子どもたちが集まり、そこに家族が車で迎えに行く、といった地域もある。
- ・ 子どもたちにとって、迎えに来てもらえるまでの時間を過ごせる場所というのは、楽しい場でもあると思う。子どもたちが日常生活の1コマとして、新文化ホールをどう使えるようになるのかという点は、イメージを持っておけると良いと感じる。

参加者：

- ・ アート版の学童保育のようなものがあっても良いかもしれない。例えば17時から19時まで、月に一回、色々なサークルや文化団体が集まって活動しているので、月に1回開放しそこで預かってもらえたら良いのではないかな。
- ・ 音楽版・芸術版の学童保育のような仕組みがここでできて、月に1回はこの催事を行っていますとか、週に2回はお預かりしますよといった形で、そこで交流ができ、施設を訪れるきっかけになると良い。
- ・ 子供たちにとって思い出の場になり、その子が親世代になった時、今度は「自分の子どもを預けてみたいな」とか「自分たちも一緒に見たいね」といった形になると、施設と市民の距離感も近くなれるのではないかな。

進行役：

- ・ ハブ機能だけでは単なるつなぎ役で終わってしまいそうなので、そこに加えて、御提案のような独自の取組ができると、旭川としての1つの個性になるように思う。
- ・ 誰がそうした機能を担うのか、担い手を育てる必要があるかもしれないが、良いコンセプトであると思う。

進行役：

- ・ 本日も活発な議論をいただき、感謝申し上げます。
- ・ 冒頭で申し上げたように、この後は、「やりたいこと」と「それを叶えるためのハード」の対応関係を整理していく。
- ・ なお、これまでも繰り返し述べているとおり、本検討会は限られたメンバーによる議論であり、前回と今回の議論だけで全ての要素を網羅できているわけではない。
- ・ しかし、基本構想の内容を踏まえた上で、重要と見込まれる事業や管理運営の方向性については、前回と今回で議論を深めることができたのではないかと思う。
- ・ その上で、本検討会を学術的に支援している北海道大学と事務局において、他事例やこれまでの議論を踏まえながら、相性の良い事業、兼ねられる事業などを押さええながら対応関係を整理していきたいと思う。

- ・ 一方、先程の議論でも「コストパフォーマンス」に関する話題が出ていたが、今後は当然コストに関する懸念が出てくる。
- ・ 近年、様々な公共事業で入札不調等が起こっているが、現時点で事業の上限額を定めるとするのは現実的ではない。半年～1年程度の間基準も大きく変わってしまい、仮に現時点で上限額を定めても、発注する頃には全く使い物にならなくなってしまう。
- ・ それよりも、現段階においては、どのような事業を効果的・合理的に実施していくのか、という意味でのコスト意識を持ちながら、対応関係を整理していくべきであると思う。

- ・ 次回はここまでの管理運営面に係る議論の成果について御確認いただきながら、今回よりもハードの方に持っていくような議論につなげていきたい。
- ・ その上で、翌年度からはハード面の具体的な検討に入っていきたいと考えている。

4 閉会